武蔵野日曜集会 復活節祈祷会

俱中一如
――ヨハネ伝第14章1～19節――

１９７２年４月２日
小池辰雄

無者キリスト　即身即道・即身即理・即身即生　共に同心　俱中一如　「ビー」が同時に「ドゥー」
パラ・エン（俱に・中に）

【ヨハネ14・1～19】

1『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2わが父の家には住処おおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処を備えに往く。3もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。4汝らは我が往くところに至る道を知る』5トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、争でその道を知らんや』6イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。7汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』8ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』9イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等にいう言は己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。11わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。12誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。13汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15汝等もし我を愛せば、我が誡命を守らん。16われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。18我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。19暫くせば世は復われを見ず、されど

汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。

●無者キリスト

今日の復活節の祈祷会はヨハネ伝14章です。

内村先生のお弟子さんには、全く日本でも錚々（そうそう）たるエリートの人物が輩出したわけですが、私の周りにはパウロのいう

「無きに等しきもの」

たちです（笑）。ところがどっこい、天国は、神の国はこの「無きに等しき者」がつくるのであって、この世のエリートがつくのではない。私は、負け惜しみでなくて、あなた方が天国では上位であると思っています。“Umwertung（ウムヴェルトゥング） aller（アラー） Werte（ヴェルテ）”〔一切の価値の転倒〕とニーチェが言いましたが、

「あらゆる価値の転倒」

である。どうぞ、そういうことで、あなた方はむしろ無に徹する方が、実はこの世のどんな偉そうなことよりも上である。じっくりそれに徹していただきたい。

道徳の世界でもみんなそうなんです。相対的な善悪よりも、そういった判断を突き抜けたところに本当の善がくる。知識の世界でもそうです。相対的な

「優れている、優れていない」

というようなことよりも、むしろ大愚に徹する方が本当の大賢になる。ということは、

「何もしないでいい」

ということではないですけれども。

そういうことで、どうぞ、我々の神における価値というものは、およそこの世の判断の価値とはちがうということを大いに自認（自任）してよろしいわけです。

1『**なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。**

まぁいろいろなことで私たちは心を騒がすことがありますが、その時にこの一句を想い出せばいい。

「なんじ心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ」

と。「信ずる」とは、

「神は一切にかかわらず成し給う。キリストは一切にかかわらず成したもう」

ということに全託する。

「クリスチャンは弱虫でどうのこうの」

というが、冗談いうなと。本当の大英雄は自分の勇気とか自分の側を認めているようなものにはない。その証拠が、ナポレオンのような大英雄がナザレのイエス・キリストの前には、最後には頭をさげた。

そうすると、イエスはどういう人かとおもったら、私が今度世に投ずるところの「無者」

である。『無者キリスト』は絶対に今年のうちに世の中に、この日本に投じます〔註：小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』は1975年10月に初版出版される〕。キリストが本当に無者であるということが、これが無限無量の有者である。私たちもその線に沿ってゆくわけです。

●即身即道・即身即理・即身即生

2わが父の家には住処(すみか)おおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処(ところ)を備えに往く。

キリストは地上に枕するところがなかったが、至るところを枕とした。また、私たちにも天界にはもう既に――地上はいくら住宅難であっても――天界は実に豊かなところである。ところが、地上におきましても、実はキリストをもっているものは貧しいようで一番豊かである。

3もし往きて汝らの為に処を備えば、復(また)きたりて汝らを我がもとに迎えん、

非常にキリストは具体的に言っておられる。

わが居るところに汝らも居らん為なり。4汝らは我が往くところに至る道を知る』

といって、イエスは信じかかって仰ったところが、トーマスが

5トマス言う『主よ、何処(いずこ)にゆき給うかを知らず、争(いか)でその道を知らんや』

「Quo vadis(クォ ヴァディス), Domine(ドミネ)?」〔主よ、どこに行かれるのですか？、ヨハネ13・36〕

というわけです。

6イエス彼に言い給う『われは道なり、真理(まこと)なり、生命(いのち)なり、我に由らでは誰にても父の御許(みもと)にいたる者なし。

非常に断然たる言葉です。キリストというひとは、即身即道のひとである。その身そのまま道であり、また、その身そのまま理、即身即理、まことの理(ことわり)である。また、即身即生、その身そのまま生命である。これは定冠詞が付いていて、はっきりと断定した言い方です。この他に父のみもとにゆく道はないという。

まぁ宗教にはいろんな道がありますから、

「それぞれどこの道を通っても至りつくところは同じだ」

というような言葉も言われますけれども。このキリストによらなければ、非常に具体的な生命の、具体的な光の、真理の最後の、無限の豊富な、このキリストが「父」といわれたその絶対者のところには行けない。その他の道でも、ある程度は行きますよ。行きますけれども、何といっても、このキリストを通して顕われているこの事態は、至りつくところの――何といいますか、こちらから本当にそれを受けとるその受け方において――いちばん豊かな道であることは、これはキリストを信じて然るべきなのです。イエス・キリストの他に――実際、まぁお釈迦さんもいろいろいますけれども――このキリストという人物

は比較を絶したひとであることははっきりしている。その点で、他を決して排斥するわけではないけれども、これは確かにユニークである。

●共に同心

7 **汝等もし我を知りたらば、我が父をも知りしならん。**

これは非常に大事なことです。

「もし我を知ったならばわが父をも知る」

という。

「私を知らなければ父は知らない」

というのと同じことです。

「もし私を知ったならば父を知る。私を知らなければ神さまはわからないよ」

ということ。

「神がどうのこうの」

といろんなことをいって、今の若い人たちが問題にしたって、そんなものはひとつも――もう問答無用なんです――キリストに来なければ神はわからない。

「神はいずこに」

といつかお話をしたときに、私はこのキリストを指したわけです。何といっても、この福音書のキリスト、またパウロや何かが証言しているところのキリスト。この新約聖書――また旧約の預言もありますけれども――このキリストが聖書の全く中心である。キリストから一切の光が、過去に向かっても、また未来に向かっても迫っているわけですから。もの凄い光源、光の源です。

今より汝ら之を知る、既に之を見たり』

と言ったんだけれども、それもまたピリポは躓いてしまった。

8 **ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、さらば足れり』**

どうしてこういうバカげた問を発しますかね。

「私を見なければ父はわからない。私を見たものが父を知る」

といっているのに、

「主よ、父を我らに示し給え、さらば足れり」

なんてね。ちゃんとその「父を知る道」を、はっきりと己を指していらっしゃるのに、またトンチンカンな問をしている。

9 **イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕(とも)に居りしに、我を知らぬか。**

キリストはなるほど偕に居られた。弟子たちは本当に一緒にご飯もたべ、歩いたし、同じ所で眠ったりしたけれども、ちっともそれが「ともに」なっていない。ちょうどあのルカ伝15章の兄さんとお父さんの関係みたいに。兄貴はお父さんと共にしょっちゅういるん

だ。非常に品行方正、学術優等なんだ。間然（かんぜん）するところのないような立派な兄さんなんだ。そんなに非常に共にいるんだが、ちっとも実は本当の共ではなかった。ということは、放蕩息子の弟が帰ってきたときに非常に怒ってしまって、お父さんと同じ心になれない。父と同じ心になれないということは、彼は本当に「ともに」でない。

「共にある」ということは即ち、やはり心の中で同心でなければダメ。心を同じうしていない者が「共に」なんて言ったって、ちっともそれは「ともに」ではない。我々は一緒に友情関係にあるが、

「心を同じうし信仰を同じうし」

とエペソ書に書いてあるけれども、その心が同じうしていなかったら、それは「ともに」ではない。キリストの側からはもう大いに「ともに」と思っているんだけれども。まぁしかし、キリストもわかっているんですよね、

「ああ、共にいるんだけれども、ちっとも共にでないな」

というわけです（笑）。

●俱中一如

我を見し者は父を見しなり、

私を見たものは父を見た。燈台下暗（もと）しである。燈台下暗しのお前たちをいかんせんと。これは聖霊が来るまでは、どうにもならんことはキリストも知ってらっしゃる。だから、この14章のあとの方に出てくるわけです。

如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10**我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。**

ここの10節からあとたたみかけて、今度は、

「居る、居る。中に、中に」

ということがうんと出てくる。何といっても、キリスト神秘主義――「主義」という言葉は嫌いだけれども――キリスト神秘です、この「神の中に」ということは。

「我の父に居り、父の我に居る」

というのは相互関係でしょ、相互的にとにかく「ineinander（インアイナンデル）」〔互いに中にある〕の、「中に」ということはもう絶対に。私は無教会にいてこの「中に」という消息をまず殆ど聞かなかったと言ってもいいかも知れません。そこに無教会がただ「信仰、信仰」といって信じ仰いでばかりいる。そういった「神秘」という言葉に対して毛嫌いしているんだ、無教会というのは。私もその線にしばらく沿っていたわけです。

「神秘主義なんていうのはダメなんだ、あれは不健全だ」

と（笑）。キリストや使徒たちがその素晴らしい神秘の世界におられたのに、無教会は神秘を毛嫌いした。「ミステリオン」〔mystērion　神秘、不可思議〕です。「Enthusiasmus（エントゥジアスムス）」〔熱狂、

熱中」という言葉がありますね、あれは「en theos（エン テオス）」「神の中に」ということで、神の中にあることが「エントゥジアスムス」という。それを「恍惚」とか何とかいうけれども、恍惚ではない。これは本当は「入神」です。入神になることです。

だから、「ともに」というのは――「俱（とも）に」とも書く――それから「中に」ということ。これは俱中（ぐちゅう）一如なんです――これは今初めて書く――俱中一如。「俱（とも）に」在るということが「中に」なければ、俱にあることが本当の俱とならない。そして、「中に」在るというときに、それが具体的に相対関係の形をとるときには「俱」になる。その俱中一如ということ。本当の親友は、「きみ・ぼく」の関係だよね。「きみ・ぼく」というその相互の関係が、

「きみがぼくか、ぼくがきみか」

という一如の関係とピタリ一つ。それが本当の親友の間柄なんだ。恋人の間もそうでしょう。ベートーヴェンがあの「永遠の恋人へ」という手紙の中の終わりの方に、

「私はお前のもの、お前は私のもの」（Ich bin dein, Du bist mein（イッヒ ビン ダイン ドゥー ビスト マイン））

と書いてある。それも非常に強い言い方だけれども。

「汝は我なり、我は汝なり。汝は第二の我なり」

なんて、いろんな言い方があるわけです。そういうキリストと神さまとの密接な関係はいかなる恋人も夫婦もかなわない。イエスが神と一如になっているこの一如のすがたは、

「我を見し者は父を見しなり」

という。それはもう、何といいますかね、全部、存在が祈り心ですよね。

●「ビー」が同時に「ドゥー」

わが汝等にいう言は己によりて語るにあらず、父われに在して御業（みわざ）をおこないたまうなり。

「父われに内住して行いたまうなり」

と。語る言も神の言だし、行う業もまた神の業だし、

「自分がしているんだ」

なんて、そんな相対的意識のない世界です。祈りはそのようなキリストとの一如の世界に入ることがもう祈りの一番大事なこつです。

11 **わが言うことを信ぜよ、**

この「わが言うことを信ぜよ」は誤訳だね、「我に信ぜよ」です。

我に信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。

と。これもそうでしょ。

もし信ぜずば、我が業（わざ）によりて信ぜよ。

「父の我に居り、我の父に居る」。それを「be」（在る）という。「ビー」を信じなければ、「do」（行い）で信じろということ。「Sein（ザイン）」（存在）と「Tat（タート）」（行為、業）。相互内住関係のこの「存在」

が受けとれないなら、私が行う「業（わざ）」において、「タート」によって私を受けとってくれと。現象〔行為〕を見て本体〔存在〕を知れということです。本当は現象を見なくても、本体を受けとることが、今日午前にも言ったこの「信ずる」ですけれども、現象がなければ信じないような信ではまだ本当の信ではないと言ったでしょ。

存在が一番すごいんだ。人間は、「何をしたか」ではなくて、

「いかに在ったか。いかに在るか」

ということ〔が大事です〕。その「いかに在るか」も今度は、「ザイン」「在」と、それから「行〔業〕」――動でなくて――わざ。在と行〔業〕。その「在る」というあり方が、「行のような在り方」というのはどういうのですか。在行一如の「在」というのはどんな「在」ですか。これはモーセに語ったエホバの、

「我は在りて在らしめるものなり」

という言です。「在りて在らしめる」在り方が本当の「在る」である。在ることが在らしめているような在り方。それは行為の奥の行為なんです。行為の奥の行為。

「Wohltat（ヴォールタート）〔善行〕は人生の目的である。人に愛の行為をすることが人生の最後の目的だ」

とゲーテが言った。それは一面そうでしょう。けれども、この在るということが、在らしめる在り方です。たとえば、カマボコのように病床にくぎ付けになって動けない人がある。これは何か人に愛の行為を示そうとおもっても何もできない。ところが、カマボコ的存在が、これが本当に神に在って祈っていれば、在ることが人を在らしめている。ものすごい力をもっているんです、その祈りが。愛の祈りをもって執り成している。だから、

「私は何もできない」

ということはないんです、人間は。どんなときにも、いや実に、在ることにおいて祈りの電波を、霊波を送っていれば。愛の霊波を送っていれば、もの凄くひとを在らしめている。いい加減な行為よりかはるかに素晴らしい。そういう、魂は全世界を駆けめぐっている。それが在ることがもの凄い動的な在り方をもっている。「ビー」が同時に「ドゥー」をもっている。私はどうしてもそういう極限のところに来なければ承知しない男なんです。

「在りて在らしめる」

なんていうことを言ったやつは世界中にいないんだよ、正直。この武蔵野の破れ幕屋にそういう啓示が来ている。キリストは、

「在ることが在らしめているような在り方。そういう私がわからなければ仕方がない、私の業（わざ）を見て信じろ」

と言う。キリストは父と倶（とも）に在ることによってもの凄い力を有っている。彼が、

「癒えたり」

と言えば、向こうの方で癒えてしまう。もの凄い力をもっている。そうでしょ。キリスト

はそこまで行かなくてたって、ちゃんと力をもってやっている。それは神さまの力が来ているからね…（異言）…。そういう祈りの世界に、皆さん。ケタがちがうですよ。しかし、「ケタがちがうなんて、それではとても話が困ってしまったな」

ではないですよ。私がしょっちゅう言っているとおり、一番最深最高の世界は絶対無条件に誰でも受け得る世界である。ですから、ちゃんとここにも書いてある。

12 誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。

世の末に至って、私があなた方にだんだんバトンタッチしていけば、あなた方は私よりか大いなる業をするし、あなた方もまた後輩がまたあなた方よりか大いなる業をする。どしどしふくらがってゆく。キリストはそのようにして、要するにキリストが我々を通して業をなしているだけのはなしで、我々がしているのではない。そういうことで、イエスは世のはてまでも世の末までも地のはてまでも展開また展開してゆく。まぁなんと素晴らしい存在だろうね。時間空間を自在に使って、在りて在らしめるというものがこの驚くべきキリストという天界の存在です。

「復活の生命」どころのさわぎではないですよ。これはもう、「復活」なんていったってね、始めっから生きているんだ（笑）――十字架で死んだようなマネをしている、まぁこれはちょっと言葉が乱暴すぎましたけれども――本当はそういうことです。

●パラ・エン（倶に・中に）

13 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。

我々を通して為してくださる。

「キリストが為してくださるから、こっちは眠っていよう」

なんて、そうじゃない。挺身しているんですから。そのキリストは我々無力者を通して有力的なことをなさる。行きつまりを知らん人です。どんなに人がどう判断したって、大丈夫ですよ。

14 何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15 汝等もし我を愛せば、我が誡命を守らん。

キリストの愛を受けとって、愛のこの関係に立てば――「誡命を守らん」なんていう言葉はもう読まなくたっていい――もう自然に誡命が出来てしまって、そしてそれが楽しく進んで行きます。

16 われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。

ここにも「偕に」があるでしょ。助主、聖霊。この聖霊が臨んできたらば、そして、「汝ら

とともに」だけれども、これは実は、

「聖霊は我々のうちに」

です。御霊は客観的な実在として在ります。と同時にまた御霊は私たちの中に内在したもう。これはペルゾナ〔persona 人格〕であると同時に我々の中に内在してくれるところの驚くべき何ものかである。

17これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。

私たちも世の人だったんだけれども、キリストに降参してからはいわゆる世ではない。世にありながらもはや世からは出ている。世にありながら世から出ているんですよ、私たちは。ですので、天国人とされているわけです。

なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。

ここにちゃんと書いてある。「彼」聖霊は汝らと偕に――「ともに」は「パラ」という字ですが――また「中に」「エン」という。「パラ・エン」なんです。「パラ・エン」なんて異言が出るかもしれないけれども（笑）。そういう「パラ・エン」という

「偕でありまた中に」（パラ・エン）

である。そういう「偕中」である――「倶中」でも「偕中」でもいい――そういう「ともに」であると同時に「うちに」である。こうなったらば、まぁなんと楽しいことですか。我々具体的存在はこの相対的な形とそれから一如の形と両方をもっているんです。

18我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。19暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。

19節までで結構です。

「汝生き給う、ゆえに我らは生く」

と。それは本当に永遠に私たちは、生きるから、キリストが我々を通して活現し給う。活き現ずる。活現し給う。そして他の人たちをまた活かしめる。活かす。必ず他動的に働いてゆく、本当の生命は。自分をどこまでも限りなく与えていくことができる。無尽蔵だから。この「ともに」とか「うちに」という世界がただそれでお終いではない。いよいよそれを人にわかち与えていく。展開していく。これが

「在りて在らしめる」

ということです。もう何といっても、そういった「ザイン」「在り方」が最高のあり方です。それはどん底の荷いの在り方。「在らしめる」というのは人を助けること、人を救いあげること。これは聖霊の力がなす。ローマ書8章の終わりのあのパウロの絶叫しているところのもの凄い愛の霊である。また午前とピタリ一つになってしまいましたけれども、そういうことです。では祈りましょう。……。聖歌623番、全部うたいます。